2005年（平成17年）7月7日（木曜日）

毎日新聞　29

「人工星」作る装置開発

天体、鮮明な撮影可能に

理研など

上空約100キロの大気中に「人工星」を作り出すレーザー装置を理化学研究所と国立天文台が共同で開発し、6日、報道陣に公開された。天体観測には大気の揺らぎが障害となるが、人工星を観測目的の天体の近くに作り出すことで、揺らぎの影響を瞬時に補正し、天体の鮮明な画像撮影が可能となるとしている。

星を眺めると、またたいて見えるのは大気の揺らぎによる現象で、特に地上15キロまでの大気の揺らぎは天体観測の大きな妨げになっている。

このため理化学研究所は、高速道路のオレンジ色の照明にも使われる波長589ナノメートル（ナノは10億分の1）のレーザー光を照射すると、上空約100キロのナトリウム層が光ることを利用。12等級程度の人工星を輝かせることに2年がかりで成功した。【下桐実雅子】

中央研究所　固体光学デバイス研究ユニット